

国内研修報告書

暮らし観光から考える大衆に向けない観光の在り方とは？

- ・研修テーマ：暮らし観光から考える大衆に向けない観光の在り方とは？
- ・研修場所：佐賀県嬉野市
- ・研修期間：2026/1/29(木)～2026/1/31(土)
- ・研修参加人数：4名
- ・記入日：2026/02/23（月）

今回の研修のきっかけは、大学の講義にゲストスピーカーである嬉野温泉大村屋の北川さんから印象的な話を聞いたからである。それは、「いくら観光で地域に人を呼ぼうとしても、暮らしがないまちに継続的に人は来ない」という話であった。これまでの私は、観光といえば有名な場所を効率よく巡り、その土地の資源を消費するものというイメージを抱いていた。しかし、とにかく不特定多数の人を集めて経済的利益を追求する大衆に向けた観光は、時にその土地本来の良さを失わせる。訪れる側も一度きりの体験を消費し切ると再度訪れることは少なく、地域と観光客の関係性が一過性で終わってしまうことに、私は強い違和感を感じていた。これに対し、北川さんが提

唱する「暮らし観光」は、大衆に合わせるのではなく、嬉野という土地に惹かれる人に思いを届け、地域のありのままの暮らしを見せるというものであった。嬉野温泉の観光は無理をしておらず持続的であり、結果として深い愛着を持った人々が集まってくる。このもう一度帰ってきたいと思わせる力の源泉は何なのか。その理由を探るべく、国内研修の制度を活用し嬉野に向かった。

初日は、暮らし観光の作り手である北川さんと一緒に、嬉野のまちあるきを行った。印象的であったのは、北川さんが地域の方と出会うたびに、私たちに「今日から三日間嬉野で過ごす法政大学の学生さんです」と丁寧に紹介してくれたことだ。この紹介をきっかけに、地域の方々は私たちに興味を持ち、三日間で訪れるべきおすすめの飲食店などを気さくに教えてくれた。また、北川さんの私たちに対する地域の方の紹介の仕方もとても温かかった。決して店主やオーナーといった役職だけで終わらせず、「きはらさんはいつも明るく地域の人にご飯を届けてくれているんですよ」「だいすけさんはお茶農家さんに弟子入りして最近独立したばかりなんですよ」といったように、その人の人柄や私たちとの接点ができる言葉を添えていた。これにより、私たちは出会った人々を単なるサービス提供者ではなく、独自の物語を持つ一人の人間として捉えることができた。嬉野に初めて降り立ち、北川さんしか知人がいなかった状態から、一気に地域内に顔見知りの方が増え、自分たちも嬉野のメンバーとして受け入れられているような感覚を得た。その後、まちあるきの中で出会った宮下さんが営

む Tea Salon TSUBAKI を訪れた。宮下さんは大学時代に難病を患い、ご自身の体調と向き合いながら、「自分の大好きなものを大切に、それを自分と同じように大切にしてくれる人に届けたい」という一心でお店を営まれていた。この言葉を聞いた時、私は暮らし観光の考え方と宮下さんの店への思いが繋がったように感じた。大衆に向けたサービスではなく届く人に届ける。相手に合わせて自分を変えるのではなく、自分という個人を起点に思いを表現する。この姿勢や温度感を持って生きている人が嬉野には多く、その人たちが営みをすることで結果的に暮らし観光が作られていくのだと学んだ。そして、これまでは北川さんが「暮らし観光」を作っているのだと考えていたが、実際にはその土地で暮らすすべての人々が暮らし観光という文化の作り手なのだということにも気づかされた。

2日目は、自転車で茶畑を巡る嬉野独自のティーリズムを体験した。道を走っていると、地域の方々が温かく応援の声をかけてくれる。前日のまちあるきを経て、私たちはすでに単なる通りすがりの観光客ではなく、一人の人間として見てもらっている喜びを感じた。午後は旅館大村屋の社員の方々にお話を伺った。驚いたのは、新入社員の方が一人の人として町に溶け込むために、まずまちあるきを研修として行うという点だ。私たちが実際に北川さんにしてもらったように、役職や肩書きではなく個人として地域とつながることで、結果的に「この町で暮らしたい」と思う人が増えている。実際に、新入社員の山口さんは、まちあるきで地元の人たちが楽しそうに暮

らす様子や温かさに触れ、嬉野への移住と就職を決めたという。ヒアリングの中で「嬉野には人がいなくて寂しいイメージだったけど、まちあるきをしてみたら地元の人もし楽しそうに暮らしているし、人の温かさに触れて住みたいと思った。」と話をしてくれた。

最終日は、日本中を旅した末に嬉野に移住を決めたご夫婦に話を伺った。このご夫婦も山口さんと同様に会いたい人がたくさんいたことが嬉野に移住する決め手だったと語ってくれた。会いたい人がいるから、ここに来る。この関係性が町のあちこちで生まれていることに、私は深い感銘を受けた。嬉野には江戸時代から続くシーボルトの湯があり、人気の観光スポットでもありながら朝6時から地域住民が集まるコミュニティスペースとなっている。そこには、観光客のために作られた非日常ではなく、豊かな日常がそのまま流れている。この暮らしの地続きにある空気感こそが、多くの人を惹きつけて離さない理由なのだろう。そして、その後に訪れたカフェ「心ここに在りき」のオーナー・しろうさんとの対話も心に残っている。しろうさんは「たまたま見つけてくれた人との偶然の出会いを大切にしたい」という理由から、SNSでの過度な発信をあえて控えていると教えてくれた。効率よく集客する手法とは違い、自分の哲学に沿ってやらないことを決め、自分の思いを表現する。無理に人を呼び寄せるのではなく、「今の自分たちの温度感」を大切に作る姿勢こそが、「自分という個人を起点に思い」であり、しろうさんも暮らし観光の作り手であることを感じた。

この3日間を通じて、私は大衆に向けない観光の理解を深めることができた。私の思う暮らし観光とは決して排他的なものではなく、自分たちが大切にしている暮らしや哲学を、嘘をつかずに表現することである。たくさんの人を呼ぶために、誰かに求められた店やサービスを作るのではない。自分が本当に作りたいものを大切にし、自分の表現したいことを追求する。そのこだわりに惹かれた人が集まり、結果として観光が成立しているのだ。いつも起点はその人自身の中にある。また、嬉野には元々「来た人を大切にし、欲張らない」という風土があることも大きい。町のサイズ感を見極め、無理に数万人の観光客を呼ぼうとせず、リピーターやファンを大切にする。こうしたやらないことを決める潔さが、オーバーツーリズムを防ぎ、持続可能な町の姿を守っているのだと感じた。昨年の真鶴での研修でも感じたが、やはりまちが人を選び、人がまちを選ぶのが暮らし観光の姿である。もともとその土地の人々が持っていた価値観をより深め、自分起点で表現していくことが、最終的な結果として最も魅力的でまた訪れたいと思う観光資源になるのだと学んだ。

今回の研修で、私は嬉野というまちが好きになりそして再び会いたい人にたくさん出会った。嬉野で暮らすことができたらいいなと移住を考えるほど私にとって自分を持って表現する嬉野の人は尊敬できる人であり、そして心地よい空間であった。ただ、留意すべき点として暮らし観光は持続可能な素晴らしい観光事例だと考えられるが、すべての地域が同じ暮らし観光を行ったら良いわけではない。大切なのは、その

観光がその地域の持っている価値観や論理に合っておりそこで暮らす人が無理をしていないということである。今回の研修で、私たちも暮らし観光や嬉野というまちに会いたい人がたくさんでき引き続き関わり続けたいと思った。嬉野という心惹かれる地域をフィールドに、次はお客さんではなく観光を一緒に作る側として中に入って行きながら暮らし観光の作り手として学んでいき、大学生活での日々の学びを活かして行きたい。